



1980年8月、村松さんが
看護師長を務める日本赤十字
社医療センター集中治療室
(ICU)に1人の女性が運
ばれてきた。

Kさんは50代半ばの女性でし
た。うつ状態だった彼女は、夫の
留守中に自ら命を絶とうとしたの
です。一命は取り留めましたが、
意識は戻りませんでした。
一般病棟へ移るとき、ご主人の
口から出た言葉は今も忘れませ
ん。「妻には苦勞ばかりかけてい
ました。あの日もうつ状態だとわ
かっていたのに、ゴルフに出かけ
てしまったんです。私のそばに寝
ているだけでいい。とにかくうつ
と生きていてほしいんです」。「助
かったとしても植物状態のまま
いいのだろうか」と考えていた私



日赤医療センターICUの看護師長
時代。進路を決める患者と出会う

Kさんのご主人から
連絡があったのは、準
備室で働いていたとき
でした。ICUに運ば
れてきてから2年がた
っていました。「病院
から来週、退院してく
ださいと言われまし
た。あちこち回ったの
ですが、すぐに入院で
きなかったり、入院費
が高かったり、付き添
りが必要だったりで……」。かな
い苦勞している様子でした。そし
て、こう言われたのです。「家で
みることはできないでしょうか」
そのときは一度家族で話し合う
よう伝えて電話を切ったのです
が、一週間後、再びご主人から連
絡が入りました。「家族会議を開
いて、家でみることに決めまし
た」。迷いが吹っ切れたのか、明
るい声でした。その変化に驚きな
がらも、私は「できるだけのお手

転機くれた夫婦との出会い、生活援助始める

退院後にどう生きるかみるのも仕事と実感

遠藤周作さんの言葉で決心、退職して開業

にとっではショックでした。

Kさんと出会った後、村松さ
んのキャリアは変化を迎え
る。看護大学の設立にかかわ
ることになったのだ。

それまでも母校の日本赤十字中
央女子短期大学で教壇に立つこと
はありました。看護教育が高学歴
化を迎えていたので、日赤でも4
年制大学へ転換することになった
のです。その準備室に病院からの
出向という形でかわりました。

いが必要だったりで……。かな
い苦勞している様子でした。そし
て、こう言われたのです。「家で
みることはできないでしょうか」
そのときは一度家族で話し合う
よう伝えて電話を切ったのです
が、一週間後、再びご主人から連
絡が入りました。「家族会議を開
いて、家でみることに決めまし
た」。迷いが吹っ切れたのか、明
るい声でした。その変化に驚きな
がらも、私は「できるだけのお手

伝いはさせていただきます」と言
いました。「でも、最終的にはご
主人がみることになるんですよ。
そのことは忘れないでください」
そこから、仕事の合間を見て、
病棟部長と担当医に連絡をとるよ
うにしました。同時に、Kさんと
家族の生活を援助するボランティア
仲間も集め始めたのです。
退院後の継続看護は病棟でも話
題になっていました。ICUに勤
務していると、救命技術が進歩し

れるきっかけとなりました。

村松さんの呼びかけに集まっ
たナース6人と、83年「在宅
ケア保障会」を設立。病院の
外へ足を踏み出す第一歩だっ
た。

Kさん1人を対象に始めた在宅
での看護活動は、最終的に5人に
増えました。続けていくうちに、
ボランティアには限界が見えてき
ました。11人になっていったナース
たちも1年でやめてしまっ
た。病棟での仕事を持ちながらの
活動ですから無理ありません。

大学のスタートも迫ってしまし
た。大学を発展させながら授業を
担当してボランティアを続けられ
るのか。中途半端にならないか。
悩む日々が続きました。

そんな私の背中を押してくれた
のは、作家の遠藤周作さんでした。
ナイチンゲール生誕記念講演を依
頼して以来、懇意にしていただ
いていたのです。「この仕事はボラ
ンティアでは無理だ」と遠藤さん
は言いました。「でも必要な人は
いる。僕も援助するからやってほ
しい」。その言葉に決心がつきま
した。

開業ナース、患者を自宅へ

③

これからは救命するだけでな
く、退院後にどう生きるかもみて
いかななくてはならない。それは看
護師の仕事なのではないか。そう
だとしたら看護の仕事は病院の外
に出て行く必要がある。Kさんの
退院は、私にそれを実感させてく
(聞き手は編集委員 大谷真幸)